A ROARING SILVER WOLF

黒豹全集

特命武装検事・黒木豹介

吼える銀狼

門田泰明

光文社文庫

黒豹全集
吼(ほ)える銀狼
著者　門田(かどた)泰明(やすあき)

1990年7月30日　初版1刷発行
1993年7月20日　　10刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　慶昌堂印刷
製本　榎本製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京03(3942)2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Yasuaki Kadota 1990
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-71152-9　Printed in Japan

R本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

光文社文庫

江苏工业学院图书馆
藏書
銀狼
はえ
ぎんろう

目次

第一章　全裸死体　5
第二章　狙撃戦線　50
第三章　嵐雪地獄　94
第四章　第三の男　135
第五章　残虐集団　178
第六章　総攻撃　240
解説　宗肖之介　262

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　全裸死体

1

一面に色とりどりのコスモスの花が咲き乱れていた。
やわらかな秋の風に揺れる花は、さながら幾色もの糸で編まれた絨毯(じゅうたん)であった。
山々は紅葉して燃え、空は澄み渡って青く、ちぎって投げたような浮き雲が一つ、ゆっくりと東の方へ流されていく。
煙草をくわえた長身の男が、コスモスの花の中を歩いていた。
かけている黒いサングラスが、ときおり日を浴びて鋭く光る。
贅肉(ぜいにく)を削(そ)ぎ落としたような、とおった鼻すじ、意志の強そうなひきしまった唇、彫りの深い端整な男のマスクは、どこか虚無的に見えた。
男は、コスモスを踏まぬよう気を遣(つか)いながら歩いているようであった。その優しさが意外に

思えるほど、男の表情は冷ややかである。
暗い翳りさえ漂わせている。
コスモスの群落がとぎれて、男の足が止まった。
彼は古い寺の前に立っていた。
真正面に本堂があり、渡り廊下で結ばれて庫裏が右側に並んでいた。
本堂の左手には、三重の塔がある。
男は、三門に背を向けて、いま歩いてきた小道を振りかえった。
見渡す限り広がるコスモスの群落の彼方に、薄く初雪をかむった白馬連峰が、天を突いて聳えていた。
例年、早いときで十月のおわり、遅いときでも十一月に入ると、白馬連峰は初雪をかむって白く薄化粧をする。
男はしばらくの間、雄大な北アルプスの山々を、身じろぎもせずに眺めていた。
男のかけたサングラスに、標高二九三三メートルの白馬岳が映っている。
目の覚めるような美しい景色に、男は心を洗われているかのようであった。
彼はくわえていた煙草を足元に捨てると、皮靴の裏で丹念に踏み潰した。
コスモスの上を吹き渡ってきた風が、男の黒髪をハラリと乱す。
着ていた黒皮のジャンパーが風に煽られ、肩から下げた拳銃ホルスターが、わずかに覗いた。

男の名は黒木豹介。

法務大臣直属の超法規の男であり、国家からたった一人、殺しのライセンスを与えられている人物である。

かつては東京地検特捜部に、主任検事として籍を置き〝鬼の黒木〟と、巨悪から畏怖された男であった。

ある日を境として、忽然と検察界から姿を消した黒木であったが、彼の肩書は現在もなお検事である。

ただし、検察官名簿から、彼の名はすでに抹消されている。

黒木は何百年もの風雪に耐えてきたと思われる三門をくぐると、本堂と三重の塔の間を、まっすぐに奥へ進んだ。

寺は、三方を竹林で囲まれている。

風が吹くたびに、竹の葉が紙吹雪のように舞いながら、黒木に降りかかった。

木洩れ日を浴びて、竹の葉はセロファン細工のように、キラキラと輝いた。

黒木は竹林を蛇行する湿った小道を歩いた。ときおり落ち葉の下で、小動物の動く気配がする。

小道の両側には、数メートル間隔で石仏が見られた。これも何百年と経っているのか、顔も肩も風化してすっかり丸くなっている。

ひときわ大きな石仏があるところで、竹林が切れて、また黒木に秋の日ざしが降りかかった。白馬連峰が、左手の方角に見える。

黒木は、古い墓地の入口に立っていた。墓石は綺麗に手入れされているが、地面は厚い苔で覆われ、ビロードを敷き詰めたようであった。人の歩いたあとだけが、かろうじて地面を露出させている。

黒木は、墓地の奥へ進んだ。幾度も訪ねてきている者の、足どりであった。ある場所をめざして、迷うことなくまっすぐに歩いている。

突き当たりを左へ折れると、今度は真正面に白馬の峰々が見えた。主峰は白馬岳である。

その峻嶺を背にして、まわりをツツジで囲まれた立派な墓があった。

墓の広さは、およそ十畳相当はあり、墓石は長身の黒木とほとんど変わらない。

墓石には『美浦家累代の墓』と刻まれ、墓石の左下には、ちょうど襖を横にしたぐらいの黒大理石の碑が建てられていた。

碑には、いつ誰が亡くなったかが、細かい字でびっしりと刻みこまれている。

最初は美浦三郎四郎義国ではじまり、没年は慶長十四年六月十日。そして末尾には美浦由紀と刻まれていた。没年は三年前の昨日である。

黒木は、黒大理石の碑に近付いてしゃがむと、美浦由紀の文字を人さし指の先でそっと撫でた。

由紀は、警察庁刑事局から派遣された、黒木の最初の秘書であった。武道、射撃などに秀で米英仏などの警察へも留学するなどしたエリートであったが、三年前の昨日、恐るべき悪と闘って凄絶な戦死を遂げている。

以来、黒木は毎年、命日の翌日には、こうして美浦家の墓を訪ねていた。

彼は、幾度も美浦由紀の文字を撫でた。

由紀が殉職した事件では、黒木も全身に数弾を浴びて瀕死の重傷を負っている。

「また来年会おうな、由紀」

黒木は、ポツリと呟いて立ちあがると、墓石に向かって丁重に頭を下げた。

彼は、墓地を出て、再び竹林の中へ入っていった。

白馬連峰が初雪で薄化粧をしていることもあってか、竹林を吹き抜ける秋風は、やや冷たかった。

黒木は三重の塔の手前を左へ折れると、境内を流れる幅一メートルほどの疏水にかかった石橋を渡って、庫裏の方へ歩いていった。

それを待ち構えていたように、庫裏の引き戸があいて、老僧が姿を見せた。

老僧は黒木を見ると、目を細めた。

「来なすったな」

「お参りは、いま済ませました」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「美浦家へ顔出しなさるのか」
「いいえ、このまま帰らせていただきます」
「そうか……」
老僧は、それもよし、というような柔和な顔つきで頷いてみせた。
黒木は一礼して、老僧に背を向けた。
彼は、由紀を供養する意味で、この寺にかなりの金を寄進していた。
美浦家は、この地方では由緒ある郷士の家柄で知られていた。
国鉄白馬駅から東へ二キロほどのところに、敷地二千坪、建坪二百坪の豪壮な屋敷を構えている。白い土塀に囲まれた昔のままの、郷士屋敷である。
黒木が、由紀の命日の翌日に墓参りをするのは、墓前で彼女の肉親と顔を合わせると、胸が痛むからであった。美浦家を訪ねないのも、そのためである。
寺を出た黒木は、コスモスが乱舞する中を、ややうつむき加減で歩いた。
黒のニットシャツの胸元が開き、そこに銀色に光るものがあった。
由紀が彼に贈った金のネックレスで、先端にはプラチナ製の小さな不動明王がぶら下がっていた。
一陣の強い風が吹き、コスモスの群落が黒木の目の前で大きく揺れて左右に割れた。
ちぎれた花びらが青空に吸いこまれるように、空高く舞いあがる。

黒木の足が、ふと止まった。

割れたコスモスの群落の中に、チラリと何かが見えたのである。丸太のような、あるいは人間の足のような感じがした。

風が弱まると、コスモスの花は、姿勢を元に戻した。

黒木は、足らしきものが見えたほうへ歩いていった。蜜を求めてか、無数の蜂や昆虫が黒木の顔のまわりを飛んだ。

十メートルほど行ったとき、黒木の目が、サングラスの下で険しくなった。

彼の目の前で、ひとりの男が仰向けになって全裸で死んでいた。

年のころは、四十七、八であろうか、上半身は半ばミイラ化し、下半身は屍蠟化していた。正常に近い皮膚の部分も、若干残ってはいる。ミイラ化と屍蠟化が共存する死体は、極めて珍しい。

黒木は、死体の傍に腰をおろして、観察した。刺されたり、撃たれたりしたような傷あとは、見当たらない。

死体をひきずるなり、かつぐなりしてここまで運んできたのであれば、コスモスが踏み倒されているはずである。

だが死体のまわりに、そういった痕跡はなかった。やわらかな土の上に、黒木の皮靴の跡が残っているだけである。

屍蠟は、気象条件に著しく左右されるが、死後三、四週間でできはじめ、七、八週間も経つとかなり全身にひろがる。

死体は、チーズのような臭気をあたりに放っていたが、毛髪も性毛も、脱落してはいなかった。

黒木は、眉ひとつ動かさずに死体を観察したあと、腕時計を口に近付けて、小さなボタンを押した。この腕時計には、防衛庁の技術陣が開発した、超マイクロ送受信装置が内蔵されている。

「こちら黒木だ、聞こえるか」

「感度良好です。どうかなさいましたの」

澄んだ女の声がかえってきた。はっきりとした応答の仕方である。

「気分はどう？」

「熱は平熱にさがりました。ご心配かけてすみません」

「見てもらいたいものがあるので、すぐに私の車できてくれないか。いまコスモスの群落の中にいるんだが」

「了解。十五分後に到着します」

黒木は交信を終えると、何事もないような表情で歩き出した。コスモスの群落の中には、とくに道らしい道はなかった。だが毎年、美浦家の墓を訪ねる黒木が歩く〝道〟は、正確に決ま

っていた。彼はその道をコスモスの小径と呼んでいる。
コスモスの小径は、南北に走る畦道とT字形に交差していた。
その交差したところに、黒木を待つタクシーがとまっていた。タクシーがとまる場所も、毎年、正確に同じであった。黒木が交信した相手は、由紀の後任の秘書、高浜沙霧であった。由紀と同じく、警察庁刑事局から派遣された才媛で、国立関東医科大学で法医学を専攻した異色のエリートである。
文武両道に優れる歴とした警部補で、黒木とともに幾度となく死線を潜っており、美浦由紀の再来を思わせるようなところがあった。
沙霧も黒木とともに、毎年この白馬山麓を訪れている。
だが沙霧は、昨夜から三十八度を超える熱を出し用心のため、宿舎の白馬東急ホテルで体を休めていた。不眠不休で挑んだ難事件がようやく解決した直後の発熱であった。おそらく過労から、風邪でもひいたのだろう。
黒木がタクシーに近付くと、運転手はドアをあけた。コスモスの花が、さかんに空に舞いあがっている。
「すみませんが、用事が長びきそうなので、帰ってください」
黒木は財布から一万円札を抜き取って、運転手に手渡した。
運転手が、愛想よく金を受け取って、恐縮した。

2

高浜沙霧の運転する一九五〇年型マーキュリーが、畦道の向こうに姿を現わした。三十六年前の車であったが、防衛庁の技術陣によって、徹底的な戦闘用のマシンに改造されている。

エンジンは八〇〇〇ccで四輪駆動。ボディは至近距離から二〇ミリ機銃を撃ちこまれても貫通しない、超硬質鋼が使われていた。

マーキュリーは、砂ぼこりを鎮めながら、ゆっくりと黒木の前に滑りこんだ。

沙霧がエンジンを切って運転席から降り立ち、シンプルボブの艶やかな黒髪に、・コスモスの花びらが一つ、降りかかった。

涼しい目をした、西欧的な美貌に恵まれた女性である。

一七四、五センチはありそうな、スラリと伸びた大柄な肢体に、真紅のセーターが似合っていた。豊かに張った乳房の輪郭が、妖しく浮きあがっている。

「熱、本当に大丈夫か」

「抗生物質が効いたのか、すっかり楽になりました」

「来たまえ。法医学者の目で見てもらいたいものがある」

黒木は、沙霧の前に立って、コスモスの小径を戻り始めた。
沙霧は、白馬連峰を仰いで美しい笑みを口元に漂わせたあと、黒木のあとに従った。
歩くたびに、セーターの下で豊満な乳房がユサリと揺れる。
それにしても、美し過ぎる警部補であり、法医学者であった。
黒木は、コスモスの花の中に横たわる、全裸の死体の前へ沙霧を連れていった。
「偶然、発見なさったのですか」
沙霧は、べつに顔色も変えず、黒木に訊ねた。
黒木は、黙って頷いた。
沙霧は、全裸死体の傍にしゃがむと、法医学者の目で、舐めるように死体を見つめた。死体には手を触れない。
彼女は、上半身は一次性ミイラになっている、と思った。
一次性ミイラとは、死体の乾燥化が、腐敗の進行より早い場合に見られる。
白馬山麓の乾燥した冷たい秋風が、死体の乾燥を早めたのだろう。
一次性ミイラに対して、二次性ミイラというのがある。
腐敗液が死体から異常に早く流出すると、死体の乾燥化が進行するが、これが二次性ミイラであった。
沙霧は、ひととおり死体を検査してから腰をあげた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com